

英語コミュニケーション能力育成を目指す附属小中学校との 英語教育科連携研究事業

－附属小中学校と連携した円滑な CLT (Communicative Language Teaching) 実践に向けての研究－

山崎友子・James Hall*, 芳門淳一・中野誉史**, 板垣健・黄川田康幸・高室敬***

*教育学部, **附属中学校, ***附属小学校

(平成 26 年 3 月 7 日受理)

1. はじめに

小学校英語活動では「コミュニケーション能力の素地」、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」、高校では「コミュニケーション能力」が各学習指導要領において目標にあげられ、小学校から高校まで一貫してコミュニケーション能力を育成することが目標とされており、教員養成学部においては、コミュニケーション能力を育成する新しい英語教授アプローチ、即ち、CLT (Communicative Language Teaching)を用いることのできる教師の養成が求められている。そこで、本研究事業では、CLT の理論とその指導力の養成方法について Part A で、CLT にふさわしい教材開発について Part B で研究を実施した。Part B では英語絵本を用いた英語活動の実験授業を実施し、活動を行う児童の心理を分析するアンケートを開発して、研究を継続中である。本稿では、附属小学校・中学校と連携して実施した、中学校・高校での英語授業における円滑な CLT 実践のための研究である Part A に焦点を当てて論じる。

実験授業の実施にあたっては、教育学部英語教育サブコース所属学生・大学院生の参加を得、附属小学校・中学校、岩手県立高校の協力を得た。

2. 方法

CLT の理論面での確認をもとに、指導技術を高める契機として CI (Critical Incident)に着目する。3つの異なる立場から、異なる場面で見られる CI を報告し、教員養成課程での養成が求められてい

る指導技術を析出し、さらに養成のためのプログラムを検討する。

異なる立場は以下の3者とした。

- 1) 学部学生の教育実習受入の立場：附属中学校英語科
- 2) 新人英語科教師としての立場：岩手大学教育学部 2012 年 3 月卒業生、岩手県立中学校勤務
- 3) 学部学生指導の立場：教育学部英語教育科

3. CLT (Communicative Language Teaching)

Littlewood (2011)は CLT を strong version から weak version まで含む umbrella term としている。

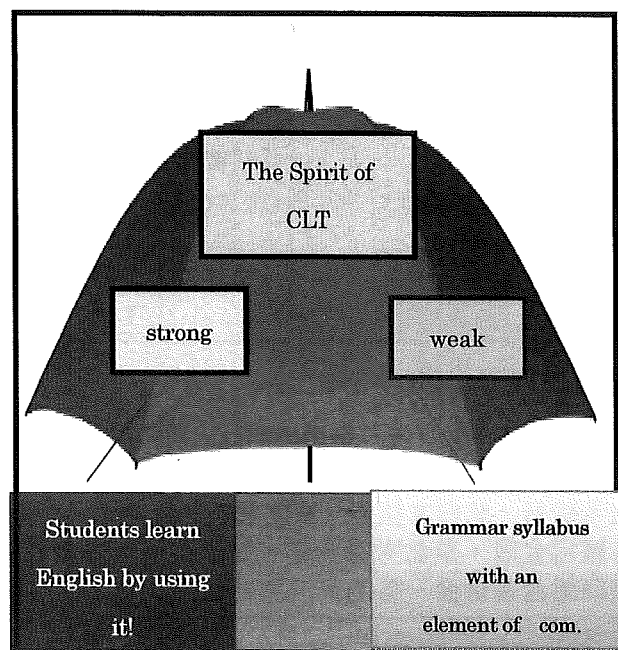


図 1. CLT 概念図

Hiep (2007)は、「学習者がコミュニケーションの必要性のために目標言語を効果的に使用できること」が CLT の目標であり、「教室内活動が学習者にとって現実的で意味のあるものとなっているときに、最も学習は成立するという CLT の精神により目標は達成される」と述べている(p.196)。

従って、学習者が授業の中で目標言語を使用することにより目標言語の習得を目指す strong version だけでなく、文法シラバスであっても、CLT の精神のもとコミュニケーションの要素が入った授業であれば weak version として CLT と呼ぶ。

CLT はコミュニケーションを志向する英語教育において必然的に求められる指導アプローチであるが、日本においては敬遠されがちな現状がある。その原因として Butler (2011)は、下記の3点を挙げている。

- 1) 概念上の制約 (実践の場の価値とのずれ、教師の CLT 理解のずれ等)
- 2) 授業レベルでの制約 (学習者・教師の問題、授業運営の方法の問題等)
- 3) 社会・組織のレベルでの制約 (カリキュラム、入試制度等)

本研究の目指す円滑な CLT 実践能力の育成に向けて、Butler の指摘する 1) 2) において工夫が可能である。CLT への理解を深めること、教師の CLT 指導技術・授業運営の技術を高めることが、CLT の実践力に繋がると思われる。

4. CI (Critical Incidents)

Richards & Farrell (2005) は “Critical Incidents” (CI と略す) を指導経験の浅い教師の経験を分析し、指導力を向上させるものと指摘している。CI とは「予定したものでも、想定したものでもないが、実際の授業で生じ、教授のあり方や学びの一側面についての知見に繋がるもの」と定義している。CI を取り上げることのメリットとして、次の点がある。

- 1) 問題の所在を認識し、解決の方法を考えることにつながる
- 2) よい教授に役立つ
- 3) 職業人としての意識を高めることに役立つ

このようなメリットが考えられるので、本研究では、円滑な CLT 実践のための指導技術の養成のあり方を考える着眼点として、CI に着目することとした。

5. 三つの異なる立場から析出した CI

学部学生の実習受入を行っている附属中学校の英語科では、教科書を使って授業を行っている実習学生の CI として次の3点を析出した。

- 1) コミュニケーション活動の必然性が不明確
- 2) (日本語での) 説明が多すぎる
- 3) 小さなステップの積み重ねが不足

1) と 2) は CLT に関わるものである。CLT の目標達成の理解とそのため指導技術不足が伺われる。3) は CLT だけでなく指導技術全般に関わる問題である。教員養成課程の学生に、CLT に対する概念上及びその指導方法についての理解の不足と技術の未熟さがうかがわれる。

公立中学校の英語科教員となって二年目の本学部卒業生からは、授業のビデオの視聴及び本研究参加者からのインタビューをもとに、次の CI が析出された。

- 4) 個々の生徒が抱える問題への対応の難しさ
- 5) Team Teaching (TT) の効果的な活用
- 6) 定着に至るまでの small steps の組み方
- 7) 英語を「書く」ことが苦手な生徒への正確な筆記の指導
- 8) 言語の使用場面と現実の不一致
(自然かつ意味のある活動を創りあげることの難しさ)

附属中学校での実習生と異なり、classroom management に関わる問題である4)が最初にあげられた。独り立ちした若い教師にとってこの課題が最も深刻な課題であり、そのために他の教科指導上の課題に集中することが難しいこともわかった。classroom management をどのように実践的に養成することができるか、教員養成プログラム上の課題としてある。

5) 6) 7) は CLT だけでなく英語教育一般の理解・指導技術に関わる問題である。「書く」ことがいかに学習者にとって難しいものであるか、現実を知ることになっている。Small steps の組み立ては教育実習の学生と同じ課題ではあるが、「定着」という視点が加わっている。長いスパンでの指導と責任を持つ正規教員のもつ課題は、教員養成課程の学生にも共有させたい。と同時に、「定着」とは何か、どのようにして達成できるのか、CLT の観点から検討することも重要である。TT は教授者が一人増え、「助っ人」と考えることもできる。負担ではなく、助っ人と考えるような TT のあり方を学ばせたい。

教員養成における英語教育一般の理解の深化と指導技術の向上は、より「現実」に即して課題として提起されることが有効であると思われる。また、困難な classroom management 上の問題があった場合も、質の高い教科の指導技術が支えとなる。

最後の8)がCLTに関わるCIである。教科書を使用しての授業の中でCLTを創り上げることが困難と認識されている。CLTをweak versionから創り上げる活動の構想力・英語力向上が課題と考えられる。

教員養成に携わっている立場から、沿岸被災地の高校での院生・学部生のTT授業に見られたCIが報告された。対象となる授業は、2012年度に計6回実施されたものである。地域の課題を日本語で学び、次にその課題を踏まえて国際的に発信するための英語の授業が本学部英語サブコースの学生(6~10名)によってTTの形式で実施され、留学生の参加も求めた。テーマは「English

Business Card を作ろう」と“Let's Enjoy an International Recipe Fair”であった(山崎, 2013)。



写真1 紙板書：食材を組み合わせて料理を作ろう

授業観察、ビデオ視聴、アンケートから次のCIが析出された。CIには課題だけでなく予想以上の成果もあり、+CIと考えた。

- 9) 高校生の満足する communication 豊かな授業ができた
- 10) Communication の内容に関する「地域の課題」についての授業を大学生は聞いていなかった
- 11) グループ活動の際、高校生が留学生を避けていることに気づき、日本語での支援が必要だと判断した

授業後、高校生にアンケートを実施した。「授業は楽しかったか」を4段階のライカート・スケールで尋ねたところ、平均が3.9(4が大変楽しかった)となった。学生の指導方法についても同様に尋ねた。[]内の数値が平均。(4が大変役立った)

- ① 大学生のデモンストレーションは名刺交換やレシピ交換の時に役立った [4.0]
- ② 黒板に貼られた表などは自分の活動に役立った [4.0]
- ③ 活動中の大学生のサポートは自分の活動に役立った [3.9]

(回答数 22名)

極めて高い数値であり、9)のCIは教員養成の過程でCLTの実践は可能であるということを示している。しかし、生徒指導(classroom management)に関しては、実習先の高校の先生の指導下であり、学部学生・院生は、生徒一人ひとりへの配慮というよりも、馴染みのない関係の中で雰囲気作りに努力することにエネルギーを使うという状況であった。

10)は「学習者の学びよりも自身の指導に注意がいく」「長いスパンのゴールよりも短いスパンのゴールに注意がいく」という経験の浅い教師によく見られる課題である(Lortie, 1975)。しかし、CLTが学習者にとり意味のある活動となったときに、より学びとして効果を発揮することを考えると、英語科教師の養成の中で、スキルだけでなくコンテンツをどのように指導していくかということが課題となる。

11)には、プラスとマイナスのCIが含まれている。「留学生を避けている」という学習者の状況を見て取ることができたのは、自分自身の教え方だけでなく、学習者の学びに目を向けることができている、+CIである。参加学生は6～10名のTTで、高校生はグループ学習を行うという場面であったために、学習者の個別の状況に気づくことができた。「助っ人」としてのTTの効果である。逆に、「日本語で支援を」と考えたのは、留学生と英語でTTをすることにより、よりcommunicativeな場面を創り出す機会を逸しており、英語による指導力の未熟さの現れである。

学生主体のTTによる出前授業において、学生は創造的な教材を作成し、学習者の理解と関心を高めることに成功した。教育実習における課題の1)3)については前進が見られる。現実の教育の現場での課題と比べると、6)7)の課題を克服している。

異なる三つの立場からのCIの分析をまとめると、自主制作教材によるCLTの実践は、学部学生・院生のTTにより可能であり、意味のある場面を作って英語学習を進めることができる。しかし、

効果的なTTを意識して行うこと、英語による説明や生徒とのやり取りという点では課題を残している。授業の中での生徒一人ひとりへの配慮やclassroom managementについては、経験の浅い教師にとり大きな課題となっている。以上の点を踏まえて、教員養成プログラム上の工夫を考えたい。

6. 今後に向けて

CIに着目し、三つの異なる立場からCIを析出することにより、課題と解決の方向が示され、CIが有効であることがわかった。コミュニケーション能力の育成という目的をもった英語教育の指導者養成プログラムにおいて、次のサイクルでの指導・課題解決型学習が有効であると考えられる。

- ① CLTの理解を深め、実践を経験する
- ② CIの活用により、実践を振り返る
- ③ 課題となるスキルの練習、内容・概念理解の深化を図る
- ④ 修正して実践する

2013年度の教育実習参加学生に、教育におけるCIについてレポートを課し、アンケートを実施した。そこから事前指導で行った指導の有用性を検討中である。これらの結果も踏まえ、今後このサイクルを教科教育法・教育実習事前事後指導の中に入れ、本研究を継続して展開する計画である。

日本の英語教育において実施を困難と考えられる傾向があるCLTも、条件を整えれば本学部の学生が実践することが可能であった。CLTの実践には、個人や一教育機関の努力では難しい側面もあるが、新しい教育アプローチに挑戦することにより、英語指導方法や学習そのものについて等新たな視点を獲得することができる。さらに、附属学校と連携した研究により、英語科教員養成及び英語教育理念について共通理解を深め、より質の高い教員養成へつながるものと考えている。

謝辞

本研究に参加して下さった卒業生の山蔭先生、参加を認めて下さった大東中学校、本学学生の授業を受入れて下さった宮古北高校に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Butler, Y. G. (2011). The Implementation of Communicative and Task-Based Language Teaching in the Asia-Pacific Region. *Annual Review of Applied Linguistics*, 31, 36-57.
- 2) Farrell, T. S. C. (2009). The Novice Teacher Experience. In A. Burns & J. Richards (Eds.), *Second Language Teacher Education* (pp. 182-189). Cambridge: Cambridge University Press.
- 3) Hiep, P. H. (2007). Communicative language teaching: unity within diversity. *ELT Journal*, 61(3), 193-201. doi: 10.1093/elt/ccm026
- 4) Littlewood, W. (2011). Communicative Language Teaching: An Expanding Concept for a Changing World. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of Research in Second Language Learning and Teaching*. (p.p. 541-557). New York: Routledge.
- 5) Lortie, D. C. (1975). *Schoolteacher Second Edition*. Chicago: University of Chicago Press.
- 6) Richards, J. C. & Farrell T. S. C. (2005). *Professional Development for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 7) ジェームズ ホール・山崎友子・芳門淳一・山蔭理恵. (2013). 初期層教員の現場に対応した C L T 実践に向けての課題と提案 (Enabling pre-service and novice teachers to conduct contextually appropriate communicative language teaching) . 全国英語教育学会札幌研究大会発表. 於北星学園大学.
- 8) 山崎友子. (2013). 「東日本大震災被災地の学校で実施した Communicational Teaching Project の有効性」 『岩手大学英語教育論集』 No. 15, p.p.1-9.